



2013年9月8日～13日参加

福岡教育大学 2年 愛子さん

学校のホームページで「CMCカンボジアスタディツアー参加者募集」の文字を目にしたとき、即座に行きたい！と思った。短期間でいいから日本を出てみたいとかねてから望んでいたし、地雷被害の実態についても興味があった。しかし何より私の決心を後押ししたのは、「カンボジアの子どもたちに会えば、自分の将来について考える糸口がつかめるかもしれない」という期待に満ちた思いだった。ひどく短絡的な気もするけれど、今思えばよくぞ決心したと、かつての自分を褒めてあげたいくらいだ。それくらい、カンボジアで過ごした6日間（厳密に言えば5日だろうか？）は、私にとって大切なものとなった。

■9月9日（ツアー2日目）

一行はアキラ地雷博物館と鬼一二三日本語教室、義足リハビリセンターを訪れた。地雷博物館ではアキラさんご本人にもお会いすることができた。穏やかな笑みを浮かべて我々を迎えるその姿は、とても元少年兵の地雷撤去スペシャリスト



には見えなかった。けれど博物館には彼が撤去した地雷の数々が展示されていて、カンボジアがいまだに戦争の遺物に苦しめられていることがうかがえた。アキラさんは

ポルポト政権の過ちを忘れないために、あえてポルポト政権の象徴たるスカーフを首に巻き、自分の子どもにはクメール語で「地雷」を意味する名前を付けたのだという。カンボジアの人がみんなアキラさんのように、子どもたちに戦争のことを伝えていけば、きっともう二度とあんな痛ましい殺戮は起こらないだろう。しかし現状はそうではない。この時初めて、私は学校での平和学習が担う役割の大きさを実感した。

辛いからといって戦争が起こったという事実を後世に伝えないのはよくない、という考えを強くしたのは義足リハビリセンターや、後に地雷被害者にインタビューを行った時だ。過去に起こった戦争を忘れることで、現在も地雷に苦しめられている人々が、そうじゃない人々から見えなくなってしまう。インタビューに答えてくださった方の中には足が不自由でもバイクを乗りこなし、軽快に笑う男性もいた。しかし、彼がそうやって笑えるようになるまでは時間がかかったかもしれない。地雷で身体の一部を失い、何よりもそのことでほかの人との間に壁ができ、どれだけ大変な居いをしてきたのだろう。せめてカンボジアの福祉制度が整っていたら……とやるせない気持ちでした。

■9月10日（ツアー3日目）

この日は主に2つの中学校を訪れた。ツアーに参加する前に読んだ大谷賢二さんの著書でそれぞれの学校が設立されるまでの経緯を知り、通っている子どもたちはあまり裕福ではないのかもしれない、と勝手に思っていたためか拍子抜けした。



女の子たちはまだ幼い子も含めピアスやリングなどのアクセサリーをしているし、年長の子どもたちともなると手慣れた様子でスマートフォンを扱っていたりする。コートライ夢中学校では、言葉が通じないことに苦しんだ。私のなげなしの英語力を駆使しても、まったく伝わらない。ツアー参加者の中にはクメール語の本を持ってきている人もいて、準備不足だったなあ、とほぞをかんだ。一方で、自由時間になると男

の子たちはサッカーをしに校庭へと駆けていき、ツアー参加者もそれに交じってなかなか盛り上がった。白線なんて引いてないもんだから、ペナルティーエリアも何もあつたもんじやない。ルールもきつと適当だけれど、その大らかさがカンボジアらしくて楽しかった。

次に訪れたのはトゥールポンローみおつくし中学校。コーントライ夢中学校と同じく、悪路をバスに揺られて、やっとたどり着いた。ここでもやっぱり言葉は通じなかったが、私が日本の食べ物の絵を紙に描くと、周囲の子どもたちが真似をして学校の絵を描いてくれた。嬉しかったのが一人は校舎を描き、一人は学校の背後にある山を描き……という風に分担して全員で一つの絵を完成させてくれたこと。その絵は今でも私の日記帳に、そのほかのカンボジアでの思い出と一緒に大切にはさんである。駐在員の曾田さんに通訳してもらいあっち向いてホイを教えたときも、恥ずかしがりながらもみんな勝負に乗ってくれて楽しかった。

■9月11日（ツアー4日目）

4日目からは観光がメインとなった。トレンサップ湖クルーズでは、広大なトレンサップ湖に浮かぶ家々を、水上ボートで見て回った。二人一組になりカヌーにも乗った。漕いでくれたのは10歳過ぎくらいの女の子。時折湖に手を突っ込んで貝殻を拾っては、その名前を私たちに教えてくれた。オールさばきも手慣れたもので、私のつたない漕ぎ方を見てちょっと笑っていて、つられて私も笑ってしまった。

昼間はマーケットを回り、夕方一行はだるま愛育園に向かった。バスで愛育園の門をくぐってみてびっくり。子どもたちが私たちが降りてくるのを、今か今かと待ち構えていたのだ。私はほかの参加者同様、着くなり6歳くらいの男の子と女の子に手を引っ張られ、奥へと走った。それからの時間は、今回のスタディーツアーの中でも一番楽しく、印象に残るものとなった。ンガッタくんという（私の耳にはそう聞こえた）その男の子はとにかく日本語が達者で、「どんぐりころころ」などの童謡を口ずさんでは私を驚かせた。彼以外にも、子どもたちはコマや折り紙など日本の遊びが得意で、私も童心にかえって一緒に遊んだ。それもそのはず、愛育園の設立者たる女性、ソリ

カさんは日本にも何度か訪れており、日本とのつながりが強い方だったのだ。彼女から子どもたちを学校に通わせる大変さを教えてもらった。愛育園の子どもたちに血のつながった親はいない。けれど、ソリカさんという優しいお母さんがいて、

たくさんの兄弟姉妹がいて、子どもたちの笑顔は本当にきらきらしていたと思う。つられて私も笑えばなしだった。夕食には「味の素」を使用したという（！）おいしい汁物などをごちそうになり、子どもたちのダンスまで見せてもらった。たった数時間。それだけの時間だったけれど、別れるのがつらくて涙ぐんでしまった。料理を作るために一緒に遊べなかった年長の女の子たちが別れ際に「あなたたちのことは忘れません」と言ってくれたこと。ンガッタ君が「また来てね。」と抱きつきながら言ってくれたこと。私も絶対に忘れない。

■9月12日（ツアー5日目）

最終日はアンコール遺跡群を回った。遺跡の数々にはただただ圧倒されるばかりだった。スタジオジブリファンの私にとって、「天空の城ラピュタ」のモデルになったというタ・プロームという遺跡は圧巻だった。ここもかつては戦地とな

っていたなんて、信じられなかった。世界遺産というだけあって、遺跡には多くの観光客が足を運ぶ。そのせいか土産品を売り歩く人もたくさんいて、中でも年端のいかぬ子どもの姿が目立ち、悲しい気持ちになった。本来なら学校に行つて勉強しているはずの時間なのに。

料理店でカンボジア最後の食事を楽しんだ後、空港へ向かった。これから日本に帰るなんて実感がわかないくらい、カンボジアで過ごした日々は私にいろいろなものをもたらした。ツアーに参加する前私は、教育大に入学したから何となく、という漠然



とした思いで教師を志そうとしていた。とりわけ子どもが好きというわけでもなく、そんな曖昧な気持ちで将来を決めてしまっているのかという思いはずっと胸の奥底にあった。けれど、カンボジアに行って、日本や日本の教育制度を異国の地で見つめなおし、なんて恵まれているのだろうと感じた。日本の教育には、無限に広がる子ども達の可能性をのばしていく力がある。カンボジアで地雷により将来の可能性を理不尽に奪われた人や、昼間も働く子供たちを見たからこそ、実感した思いだ。そして、それでもたくましく生きてゆこうとするカンボジアのカンボジアの人々の姿と暖かい笑顔を、日本の子どもたちにもぜひ知ってもらいたいと思った。そのために、教師になりたいと、今なら胸を張って言える。

CMC スタッフの皆様方、駐在員の曾田さん、通訳のアンさん、ツアー参加者の学生のみんな、そしてカンボジアで出会ったすべての人々に感謝の気持ちを込めて。

またいつかカンボジアを訪れようと思う。それまで、日本でボランティアに参加し、私にできることを積み重ねていこう。